

日本語学会 第 154 回大会発表要旨

The 154th Meeting of the LSJ

Abstracts of Oral presentations, Poster presentations, and Workshops

期 日: 2017 年 6 月 24 日(土)・25 日(日)

会 場: 首都大学東京

〒192-0397 東京都八王子市南大沢 1-1

Dates: June 24-25, Sat.-Sun., 2017

Venue: Tokyo Metropolitan University

Minami-Osawa 1-1, Hachioji-shi, Tokyo, 192-0397, Japan

第 1 日 (6 月 24 日)

13:00-17:40 口頭発表 (1 号館 1 階、2 階、3 階)

第 2 日 (6 月 25 日)

10:00-12:00 ワークショップ (1 号館 1 階、2 階)

11:30-12:50 ポスター発表 (1 号館 2 階)

13:40-16:40 公開シンポジウム (6 号館 1 階 110 教室)

Day 1 (June 24th)

13:00-17:40 Oral Presentations (The 1st, 2nd and 3rd floors of Building #1)

Day 2 (June 25th)

10:00-12:00 Workshops (The 1st and 2nd floors of Building #1)

11:30-12:50 Poster Presentations (The 2nd floor of Building #1)

13:40-16:40 Symposium (Room #110, the 1st floor of Building #1)

■口頭発表 Oral Presentations

[A-1]

When an onomatopoeia triggers different semelfactive interpretations: An experimental study

Shoko Shida, Natsuno Aoki, Kentaro Nakatani

Semelfactive verbs can denote either a punctual or iterative event depending on the types of temporal adverbials that modify them. This study suggests that different onomatopoeia can also trigger different aspectual

interpretations. We report the results from a self-paced reading experiment showing that reduplicated onomatopoeia may trigger aspectually different semelfactive interpretations compared with simple onomatopoeia. We found a significant interaction between the temporal adverbial factor and the onomatopoeia factor in the spillover region after the critical verb in the direction such that the Durative adverbial x Simple onomatopoeia condition was read slower than the other conditions. This indicates that there was a conflict between the aspectual interpretations triggered by temporal adverbials and the ones triggered by onomatopoeia.

[A-2]

「誰も」を含む項・述語依存関係の処理-自己ペース読文実験による検討-

津村早紀, 広瀬友紀

項・述語の依存関係の処理では、項と述語の要素間の距離が離れている場合、それらが離れていない場合に比べて処理負荷が増大し、その処理負荷を反映して *locality effect* が観察されることがある。本研究では、日本語における主語と述語の要素間の距離の違いが処理負荷に影響を与えるかどうか、否定極性表現 (NPI) の一つであり、全称量化詞である「誰も」を含む文と、NPI ではない「誰もが」を含む文を用いて検討した。自己ペース読文実験の結果、NPI である「誰も」と NPI でない「誰もが」の両条件で、*locality effect* が観察され、全称量化詞の場合、主語と述語の要素間の距離の違いが処理負荷に影響を与えることが示唆された。

[A-3]

タロコ語文理解実験からみる基本語順と普遍的認知特性について

—事象関連電位を指標として—

矢野雅貴, 新国佳祐, 小野創, 木山幸子, 里麻奈美, Tang, ApayAi-yu,

安永大地, 小泉政利

多くの言語において、主語が目的語に先行する SO 語順は、目的語が主語に先行する OS 語順に比べて理解する際の負荷が低い。しかし、SO 語順を基本語順とする言語を対象とした従来の研究では、SO 語順に対する選好性が、個別言語の基本語順によるものなのか、あるいは、人間の普遍的な認知特性によるものなのかは不明である。そこで本研究では、VOS 語順を基本語順とするタロコ語を用いて、これらの仮説の妥当性を検証した。文・絵一致課題では、語順 (VOS・SVO) とヴォイス (Actor Voice・Goal Voice) を操作した 4 種類の文を聴覚呈示し、その間の ERP を計測した。その結果、ヴォイスに関わらず、SVO 語順の方が VOS 語順に比べて処理負荷が高いことが示された。これは、SO 語順選好が人間の普遍的な認知特性を反映しているというわけではなく、文処理上選好される語順は統語的基本語順を反映するという仮説と整合する。

[A-4]

中国語を母語とする日本語学習者による正順とかき混ぜ語順の受動文の理解

謝 尚琳, 小泉 政利

日本語母語話者を対象とした日本語の文処理実験では、態（能動，受動，可能）の種類に関わらず基本語順文よりもかき混ぜ語順文のほうが処理時間が長いという「かき混ぜ効果」が観察されている（Tamaoka et al. 2005; Miyamoto & Takahashi 2002）。本研究では、中国人日本語学習者がどのように日本語の態と語順を処理しているかを検討するため、習熟度の異なる2グループの学習者を対象にして、文正誤判断課題を用いた実験を行った。その結果、受動文は能動文よりも、かき混ぜ語順文は基本語順文よりも、反応時間が有意に長かった。また、受動文の方が能動文よりも語順の効果が小さかった。さらに、受動文においては、低習熟度の学習者よりも高習熟度の学習者のほうが語順の効果が大きく、より母語話者に近い処理を行っていることを示唆する結果であった。

[A-5]

非対格動詞と非能格動詞の漢語動詞の読み時間の比較

吉田絢奈・宮本エジソン

影山（1993）では、漢語動詞が非能格動詞の場合は「—する」及び「—をする」が可能だが、非対格動詞の場合、「—をする」を許さないと言われている。本実験では、日本語母語話者36名に（a）、（b）のような文を用いた自己ペース読文課題を行い、その結果、動詞の種類（非能格動詞、非対格動詞）とヲ格の有無の交互作用が確認された（ $p = .037$ ）。つまり、従来の先行研究による内省判断と一致し、（a）よりも（b）のヲ格ありの読み時間に遅延が見られた。この結果より、母語話者は文を読みながら動詞の種類とヲ格の共起について瞬時に計算していることが示唆できる。

（a）非能格 木村さんによると、朝10時ごろ入院中の松本さんが散歩（を）したようだ。

（b）非対格 インターネットによると、80年代に日本車の輸出が増加（を）したようだ。

[A-6]

高齢女性による終助詞「ね」の高評価：対人的文末モダリティ認知の調査から

木山幸子

異世代間言語コミュニケーションにおいて適切な対人距離を調節する指針を提供するために、233名の高齢男女を対象として、公共の場で若年者から向けられる指示に対してどのように感じるかを問う調査を行った。各例文を終助詞「ね」および対者敬語の有無に応じて用意し、30代の男女職員に言われた場合の快/不快感を6段階で評定してもらった。その結果、高齢者が30代職員からの指示に抱く快/不快感には、対者敬語と終助詞の有無、そして職員の性差が有意に影響していた。対者敬語および

終助詞の不使用に対する不快感は、男性より女性職員からの指示に対して強く抱かれ、その不快感は男性より女性の回答者のほうに強く表れた。また、「ね」の有無の効果は、男性より女性回答者に強く影響していた。男性より女性がより敬語使用を求められることはこれまでに例証されていたが、終助詞「ね」の認知に性差があることは、本調査によってはじめて明らかになった。

[A-7]

読み時間と節境界について

浅原正幸

本研究では『現代日本語書き言葉均衡コーパス』に対する読み時間アノテーション BCCWJ-EyeTrack と節分類情報アノテーション BCCWJ-ToriClause を重ね合わせることで、節境界における日本語母語話者の読み時間のふるまいについて、線形混合モデルに基づき検討した。節の大分類の比較では、ほぼすべての節末で読み時間が短くなる傾向が見られた。補足節においては名詞節と引用節で読み時間が短くなる傾向がみられたが、疑問節ではそのような傾向が見られなかった。名詞修飾節においては、補足語修飾節以外の節末表現で、読み時間が短くならない傾向みられた。副詞節においては目的・相関で読み時間が短くならないほか、手段で読み時間が長くなる傾向がみられた。並列節においては順接的並列で読み時間が短く傾向があり、逆接的並列で有意差までは出ないが読み時間が長い値が得られた。

[B-1]

類似言語におけるウェブコーパス整備：マレー語とインドネシア語の言語判定の事例

野元裕樹，赤瀬川史朗，塩原朝子

ウェブコーパスの登場で、大規模コーパスを短期で構築できるようになった。しかし、類似言語が存在する場合、データ収集の際の言語判定を工夫しなければ、ある言語のコーパスに別の言語が大量に混入する。ライプツィヒコーパスコレクション (LCC; Quasthoff et al. 2006) のマレー語とインドネシア語のサブコーパスでは、この問題が生じている。本研究では、新たな言語判定による LCC 改良の方法と結果を報告する。

言語判定には、両言語における異綴り語 758 語のリスト (Nomoto et al. 2014) と上位 1,000 語の高頻度語リストを利用した。現地特有の人名・地名を除いた高頻度語リストをまず適用し、それによって判定できないものを異綴り語リストで判定する場合に、最も精度が高くなった。また、含まれる文の数が少ないページは判定不能になることが多かった。

本研究の知見は、同一言語の変種のコーパス構築や、それを見据えた言語レベルでのウェブコーパス構築一般にも有益なはずである。

[B-2]

A Reflection on the Clustering in Corpus Linguistics

Akitaka Yamada

This study examines two issues about agglomerative clustering analysis, not well-discussed in introductory textbooks of corpus linguistics. First, this study discusses an appropriate choice of *the distance measure*. When we discuss the ratio of competitive constructions, the oft-used distance measure, *i.e.*, the Euclidian distance, is not the best choice. Second, the study also discusses the information lost in the clustering algorithm and shows some auxiliary ways to supplement clustering analysis. These claims are exemplified in several case-studies from different research traditions in linguistics to show how unsupervised studies support and affect the research in theoretical linguistics.

[B-3]

敬語の習得時期とその話者属性差：岡崎敬語調査資料の分析

柳村裕

国立国語研究所による「岡崎敬語調査」の短文発話資料を分析し、個人の生涯における敬語の習得時期と加齢変化を考察する。各種敬語形式のうち、丁寧さが比較的低いといえる「デス」「マス」などの形式（いわゆるデスマス体）は、話者の加齢に伴い使用数が減少するのに対し、丁寧さの高い「ゴザイマス」「テイタダク」などは加齢に伴い使用数が増加する。デスマス体は個人の生涯における早い時期に習得され、より丁寧な形式の習得に伴い使用数が減少すると解釈できる。

また、以上の敬語の習得・変化パターンには、話者の社会的属性による差異が認められることを示す。丁寧さの高い敬語形式の使用数が加齢に伴い大幅に増加する属性（女性、接客系職業）と、そうでない属性（男性、事務系職業）がある。この結果から、話者の社会的属性・立場に応じて、敬語を多く使う話者ほど習得が進み、より多くの敬語を使用するようになるという解釈を提示する。

[B-4]

2015年・2016年の日本語歌謡曲における特殊モーラについて

平田秀

本発表では、近年発表された日本語歌謡曲における特殊モーラの自立性について論じる。日本語の特殊モーラを、二重母音の副音であるイ音 (/J/)・長母音の後半部 (/R/)・撥音 (/N/)・促音 (/Q/) の4種と定義し、曲中で特殊モーラが1つの独立したリズムの単位として認められるか否かについての分析を行う。歌謡曲が同一のフレーズを繰り返す特徴をもつことを利用し、本発表では、音符の付与のパターンをみることにとどまらずに、歌謡における特殊モーラの自立性を分析する。

分析結果は以下の通りである。自立性の認められる特殊モーラの出現率は、/J/ > /N/ > /Q/ > /R/の順で高い。この結果は、歌謡曲においては作曲者の意図によって各モーラの持続時間が自在に変化し、話し言葉におけるモーラのもつ等時間性が保証されないことによって生じた可能性を指摘する。

[B-5]

ガナン語における音節末閉鎖音付加

藤原敬介

本発表ではガナン語（チベット・ビルマ語派ルイ語群、ビルマ）において音節末で二次的に声門閉鎖音が付加する現象を検討した。具体的には、ルイ語群に属するチャック語やカドゥー語において *i* または *u* でおわる語について、ガナン語ではさらに声門閉鎖音があらわれている現象について考察した。その結果、共時的にはほぼ *i* または *u* としてのみあらわれる語に対して、ルイ祖語では **i* または **iy*、**u* または **uw* と再構することが可能であり、**iy* または **uw* と再構されうる形式で高声調ではないときに、ガナン語では二次的に声門閉鎖音が付加していることがわかった。ルイ祖語の **iy* および **uw* は、チベット・ビルマ祖語の **iy* および **uw* とほぼ対応する。従来は文語ビルマ語またはマル語の形式が不明であればチベット・ビルマ祖語の **iy* と **uw* は再構が困難であったけれども、ガナン語の語形もまた根拠となりうる可能性をしめした。

[B-6]

アイスランド語における疑問文のイントネーション

三村竜之

アイスランド語の疑問文は疑問詞の有無を問わず文末に下降調が現れることを発表者は指摘してきたが、次の二つの問題点が残されていた: (i) 一語文のような不完全な文構造の疑問文の文末音調; (ii) 平叙文（文末音調は下降調）との音調上の差異。本発表では、臨地調査を通じて発表者が採取した一次資料に基づき、上記の問題点に関して以下の結論を導く。(i) 先行研究が着目してこなかった疑問詞のみからなる疑問文や文構造が不完全な疑問文に着目し、母語話者による読み上げ調査から得られた資料を精査した結果、文末音調は全て下降調であった; 従って、アイスランドの疑問文は、疑問詞の有無や文構造が完全か否かを問わず、文末音調は一貫して下降調である。(ii) 平叙文と疑問文のピッチ曲線から基本周波数の最高値と最低値の差の平均値を算出したところ、平叙文と疑問文を区別する有意な差異は確認されなかった。

[B-7]

ポーランド語の語形成における子音の硬軟の統一性

渡部直也

ポーランド語において語幹が「軟子音」で終わる名詞は、縮小辞形成接辞 /-(ε)k-/が後続する場合に「硬子音」に中和することが指摘されてきたが、子音の種類によってその頻度は異なる。オンライン辞書の調査の結果、閉鎖音は中和しやすいのに対し共鳴音は中和を生じない傾向があった。本発表ではこのことから、本現象が特定の軟子音と[k]との連続を忌避するために引き起こされることを指摘する。しかしながら、接辞における母音の出現によって当該子音連続が生じない場合においても、中和現象は起こりうる。これについては、語変化形間の統一性 (paradigm uniformity) が作用していることを主張する。本発表の分析は、語の派生における音形の決定において、各活用形における派生過程のみでなく、活用変化のパラダイム全体が考慮されうることを示唆するものである。

[C-1]

英語の不定詞関係節・目的節における空所の埋め込みの深さについて

西前 明

Ross (1986: 231) の文法判断によると、不定詞関係節の空所が埋め込まれた定形節の中にあると容認度が下がる (?Here's a knife for you [to say [that you cut up the onions with ___]].)。石居 (1985: 73) は、顕在的關係詞を用いた不定詞関係節の空所は埋め込まれたfor不定詞節の中に置くことはできないと述べている (*I found a cot [on which to arrange [for Mary to sleep ___]].)。Chomsky and Lasnik (1977: 464) は、先行詞が不定詞の意味上の主語でかつその先行詞が節の主語であると容認度が下がると述べている (?A man [to fix the sink] is at the front door.)。これら3つの異なる現象の事実確認をした上で、それらをChomsky (2008) のフェイズを用いて統一的に記述する。

不定詞目的節についても観察する。本発表の調査によると、関係節の場合と同じく、空所を定形節の中に置くことはできないが、for不定詞節の中には置ける (I bought it [to arrange [for Mary to sleep on ___]]./*I bought it [to arrange [that Mary should sleep on ___]].)。すなわち、目的節の方が関係節より制限が緩い。その違いの理論的説明は今後の課題とする。

[C-2]

ドイツ語の完了助動詞選択に於けるアスペクトの影響

藤井俊吾

ドイツ語には二つの完了助動詞、haben (=have)及び sein (=be)を使い分ける現象が存在する。一般的に移動や状態変化を表わす自動詞のみが sein を助動詞に選び、それ以外の自動詞や他動詞・再帰動詞は haben を選択するとされるが、藤井 (2016)では kollidieren「衝突する」や treffen「会う」といった「衝突」や「遭遇」を表わす動詞が主語を Ackerman & Moore (1999)の提案した TELIC ENTITY (終結点の存在する事態を表現する項) として実現させる場合に sein を選択することを示した。本発表では、単

独で主語を TELIC ENTITY として実現させうる動詞が、移動や状態変化のみを表わす動詞とは異なり、atelic な事態を表現する場合でも sein を助動詞に選択する事態について論じる。単独で telic な事態を表わす動詞は small verb によってアスペクトの強制 (coercion) を受けるが、small verb による coercion を受ける以前の統語的段階、つまり VP が完了助動詞選択の基準となっている為に問題となる助動詞選択の特異的振る舞いが生じていることを示す。

[C-3]

Unaccusativity and Possessor Raising in Chinese

Linyan QIU and Satoshi OKU

Unaccusative verbs in Chinese show two interesting properties. (a) They allow the single argument to stay in the complement position but the argument is supposed to be “indefinite”. (b) They may have two arguments admitting an NP even with a strong determiner to appear in the complement position. We propose that these properties are reduced to a single interpretive property that the argument staying in the complement position of unaccusative verbs receives an interpretation as “a part of the whole”. This interpretive property is in turn reduced to a property of Partitive Case. Regarding Unaccusative Transitives we argue for the possessor raising analysis in which the possessor and possessee make an underlying single constituent.

[C-4]

Language Acquisition of Parametric Variation in Clausal Comparatives based on Subset Principle

Ryosuke Hattori

Some languages (e.g. Japanese, Hungarian and Russian) disallow a subordinate sentence following “than” when degrees of adjectives are compared (Degree Clausal Comparatives; DCC), while allow it when quantities are compared (Quantity Clausal Comparatives; QCC). Based on this cross-linguistic variation and the Subset Principle, this paper proposes a parameter, of which the positive setting is [+DCC], and makes a prediction that children learning a language with DCC would have to set the parameter value before being able to comprehend DCC, thus younger English-learning children should be better at QCC than DCC. The prediction was confirmed to be true ($p = .0173$ by Wilcoxon signed-rank) by experiments using the truth value judgment task (TVJT) on 15 English-learning children (3;03-5;10, mean = 4:05).

[C-5]

Counterfactuality of deontic *should have* in English

Hiroaki Saito

Unlike epistemic modals, counterfactuality of deontic *should have* statements in English is not cancellable.

- (1) If Jones had taken arsenic, he would have shown just exactly those symptoms which he does in fact show.
[So, it is likely that he took arsenic.] (Anderson 1951, von Stechow 1998)
- (2) # (According to the library regulations,) you should have returned the book yesterday. And return it you did.

I argue that this uncancellability is due to revision of the modal base with which *should* is interpreted. I show that the proposed analysis can also capture the fact that *should have* statements are felicitous when the truth of the prejacent is uncertain.

- (3) You should have returned the book yesterday. Did you?

[C-6]

Agentivity in the unaccusative structure

Kaori Miura

Unaccusative verbs do not select the external argument (Burzio 1986, a.o.). By the hypothesis, we expect that a kind of Subject-Oriented Adverbs (henceforth, SOAs) such as *wazato* ‘intentionally’ should not be allowed in the unaccusative structure. Contrary to this expectation, SOAs are indeed allowed in a class of unaccusative clauses that represent the action (e.g., *taoreru* ‘fall.down’). The nominative subject in this construction reveals the dual nature of both the external and the internal argument. This study provides an account for how these SOAs are licensed in the aforementioned unaccusative construction. I argue that the SOA is the small clause whose subject is PRO (Bowers 1993, a.o.); and it is licensed when the PRO is bound by the derived subject.

[C-7]

Introducing Quote in Japanese and Its Crosslinguistic Relevance

Koji Shimamura

I will investigate the nature of the report marker (Rep) in Japanese, i.e. to. Rep, insofar as I am aware, has been considered to be a complementizer in the literature since early 70s (Kuno 1973, Nakau 1970). However, I will challenge this view, arguing that the quote in Japanese is embedded by the invisible verb SAY. Specifically, I propose that Rep is the quote-shifting functor in the sense of Potts (2007), so that it takes any utterance of type u

and an entity which is the quote source, yielding the product type $\alpha \times t$. Then, I argue that SAY is the only item that can introduce $\alpha \times t$ to the structure, discussing its syntactic/semantic consequences and its relevance to other languages.

[D-1]

シダーマ語の「言う」／「する」を使った表現の慣用化：脱イディオフォン化と語形成

河内 一博

シダーマ語（クシ、エチオピア）には、「言う」／「する」を表す動詞とともに、他の表現では通常使われず、屈折変化をしない語（以下で X）を使った慣用表現がある。同じ X に対してどちらの動詞を使うかにより他動性の対立を示すことが多い。X はイディオフォンから発展したと思われる擬音語であることがあり、脱イディオフォン化とともに X は慣用化されている。Dingemanse & Akita (2016) によると、表現性と形態統語的統合度は反比例する。シダーマ語の場合、脱イディオフォン化とともに X は言語音でなければなくなり音韻的に制限を受けるという点で表現性を失っている程度であり、形態統語的統合度も大きく強まっははいない。ところが、さらなる慣用化により、この慣用表現が短縮された動詞や、X から派生した名詞がある場合があり、語形成や派生を起こして、X が独立した品詞として文法のシステムに統合されていると言える。

[D-2]

クリック子音体系の言語獲得：グイ語事例研究

中川裕

コイサン諸語のクリック子音は「有標」でありながら語彙内頻度が高いという奇妙な特徴をもつ。この音類を幼児は一体どのように獲得するか？本研究はコイサン諸語コエ語族グイ語（ボツワナ共和国）を話す幼児を対象とする調査に基づき、クリック子音獲得過程に関する初めての研究成果を報告する。調査の結果、幼児の発音には非クリック子音によるクリック子音の代用（脱クリック化）が多数観察された。そのほとんどは、聴覚的類似性を犠牲にしながらも調音的特徴の部分的保持を優先する代用（調音特徴優先タイプ）であった。発表では、幼児の発音における、(i)代用パタンの規則性、(ii)流入音タイプ間の調音的安定性の階層、(iii)13系列間の獲得順序の階層、という3つの新知見を記述し、さらにそれらの説明を試みる。特に(iii)については、共通点がなく恣意的組合せに見える3系列から成る音類の音声的説明について論じる。

[D-3]

ランバ語の2種類の Anterior -li-VR-ile 形式と -aa-VR-a 形式ー

牧野友香

ランバ語には、時制接辞-*li*-と末尾辞-*ile* の組み合わせによって構成される Perfect と呼ばれる形式 (以下-*li*-VR-*ile* 形式) と、時制接辞-*aa*-と末尾辞-*a* によって構成される Immediate Past Indefinite と呼ばれる形式 (以下-*aa*-VR-*a* 形式) がある。前者は発話時に完全にその状態になっていることを表す (Doke 1938:258-259)。後者は「発話時と同じ日に起こった行動を表」し、さらに動詞によっては現在の状況を表すこともある (Doke 1938:261)。両形式とも、動詞が表わす事象が発話時に先行して起こり、その状態が今も継続していることを表す Anterior (Nurse 2008) だと考えられるが、-*li*-VR-*ile* 形式が事象の結果が継続していることを重点的に表しているのに対し、-*aa*-VR-*a* 形式は動作の終了や状態変化を重点的に表す、という違いがある。

[D-4]

スワヒリ語マクンドゥチ方言における主題を標示する指示詞の縮約形

古本 真

スワヒリ語マクンドゥチ方言の近称と中称の指示詞には、基本形に加えて縮約形が存在する。縮約形は、以下のような述語の前の指示詞基本形を伴う名詞句と照応する例でよく観察される。

<i>mt^hu</i>	<i>yuno</i>	<i>ka-ja</i>	<i>yu</i>
person	this.c11	3SG.SM-come.PFV	this.c11
「この人は来た」			

本発表では、指示詞縮約形が主題を標示していることを記述する。述語の前の主題位置にある構成素と照応すること、先行文脈の指示対象と照応することから、指示詞縮約形が主題と照応していることが示唆される。そして、非主題構成素 (Wh 疑問文の答え、*kila* 「あらゆる」を伴う名詞、事象報告文の主語) と照応できないことから、指示詞縮約形が主題と照応していることが分かる。

主題構成素が二つある場合、指示詞縮約形はどちらか一方しか標示できない。このことから、指示詞縮約形は相対的に有標な主題を標示している可能性が考えられる。

[D-5]

タイ語小辞 *kôo* の対話者志向の機能：会話コーパスの分析

高橋清子

タイ語小辞 *kôo* は、基本的には述語の直前に生起し、述語が表す命題内容をそれ以前の談話文脈に関連付けつつ、その命題内容を前景化し、結果的言明として標示する。多くは語りの中で使われ、認識志向の機能 (結果/帰結の標示) を基盤とした談話志向の機能 (談話の結束性の標示) を果たす。会話では、対話者志向の機能 (対話者への協調的対応) も果たし得る。数あるタイ語の語用論的小辞の中で、談話志向の機能と対話者志向の機能の両方を持つのは *kôo* だけである。

kôo の対話者志向の機能について詳しく調査するため、会話コーパスから kôo の使用例を収集し分析した。節の先頭であれ、述語の直前であれ、発話初頭で kôo を使う話者は、対話者の発話を考慮し、その発話内容を自らの叙述の前提としていた。節の先頭の kôo は「質問への返答」や「言明への反応」を標示し、述語の直前の kôo は「共同完遂（対話者の発話を引き継いで単一発話として完遂させる）」に寄与していた。

[D-6]

オリア語における、同一格の連続を許す構文環境と、許さない構文環境

山部 順治

オリア語（印欧語、インド東部）では、文中で同一格の名詞が連続することが、構文環境によって可能だったり不可能だったりする。

本発表は、これに関して事実①～④を報告する。

- ① 統語上の主語を欠く節においては、同一格連続が排除される。
- ② ①に当たる節が複文の一部をなす場合、同一格連続は、該当節に止まらずその上位節や下位節にまで及ぶ領域から、排除される。
- ③ 当該の同一格は3つ：目的格どうし、所格どうし、奪格どうし。構造格か意味格か、あるいは、動詞の必須項か付加的項か、の区別は問題でない。
- ④ ③の3格について、（①②で規定される）排除の構文環境の種類は同一。

分析上の主張は2点。

- (ア) ③④から、同一格連続に対する制約は、格付与のしかたでなく、格形の実現のしかたに関する。
- (イ) ②から、同制約が点検する文中領域は、ときに複数の節を跨ぐまで伸びる。同領域が一定の大きさで、ときに名詞句がその内あるいは外へ移動する、という分析はできない。

[D-7]

ポポロカ語 *tí 「やつ」の文法化

中本 舜

ポポロカ語の tí は、方言によって名詞化標識、斜格前置詞、不定代名詞、フィラー、定性標識、場所疑問詞などとして機能する。本発表では、内的再建と比較再建により文法化の経路を記述し、通方言的な用法拡張を記述する。

ポポロカ語 *tí はマサテク語の *ti 「男の子」と音対応し、共時的に名詞的な性質を持ち、関係節の形成においていくつかの名詞について語彙的な制約を持つ。よって、*ti は他のいくつかの名詞

とともに light noun として文法化し、意味の漂白を経て名詞化標識として文法化したものと考えられる。

また、メツォントラ（南西）方言はイスカテク語 thī「日」に対応する tī´ を時間句に用いるが、これは 16 世紀テペヒ（南西方言）の資料においても <thiy> として現れる。これは、その他の方言における tī が 2 つの語源を持つ可能性を示唆する。

[E-1]

ペルシア語の関係節からみた「語」における意味と形式のミスマッチの問題について

榎村 輝

Dixon (2010) が指摘するように、どの言語においても「語」を定義することは非常に難しい問題を含んでいると考えられる。本発表の目的は、ペルシア語のインフォーマント調査を通じて、Lambton (1953) などに代表されるペルシア語の記述文法では深く議論されてこなかった、ペルシア語の「語」に観察される意味と形式のミスマッチの問題を考察することにある。

第 1 に、ペルシア語の複合語は、音韻および意味としては「語」としてのまとまりが見られるにも係らず、その形態的緊密性が破られ得ることを示す。第 2 に、いわゆる「ペルシア語の関係節」は、西洋語の文法規範にしたがうと、関係節と呼ぶことができるが、それが文の途中に存在する場合、音韻的には「語」に近い特性を示すものであることを指摘する。その上で、ペルシア語では、補文のタイプおよびそれが生起する統語的位置によって、節としての独立性に段階性があることを示す。

[E-2]

フィンランド語の非定形節における主格目的語

梅田 遼

フィンランド語では目的語の格として主格 (-ø) ・属対格 (-n) ・分格 (-(t)a) のいずれかが現れうる Differential Object Marking (DOM) の現象が見られる。通常 of 定形節では定性に基づいた目的語の属対格と分格の交替が起こるが、命令文・非人称文・一部の非定形節などでは形態論的には主格と同形となるゼロ形目的語と分格の交替が見られる。本発表ではこのゼロ形目的語を主格目的語とみなし、非定形節に焦点を絞ってこの格のステータスについて機能主義的な立場から考察する。フィンランド語のある種の非定形節中の目的語は興味深いふるまいを示し、ある場合においては主格または属対格のどちらか一方のみが可能であるが、ある場合においては主格と属対格の自由変異が認められるという現象が観察される。本発表ではこれらの現象について統語構造と名詞句の意味特性という二つの側面から説明を試みる。

[E-3]

満洲語文語の従属節属格主語の機能について

山崎雅人

満洲語文語の従属節主語は主格か対格か属格をとる。○**si-men-king**【主格】*boode jihe seme donjire jakade*, (西門慶が家に来たと言うのを聞いたので) 前後の文脈に帰宅に関する言及はなく無標の情報である。○**si-men-king be**【対格】*jihe seme donjifi*, (西門慶が来たと言うのを聞いて) 前段に「やはり私が行って半時経たずに旦那を連れて来ましたよ」とあり、主題となる動作主を対格にした発言である。○**si-men-king ni**【属格】*jihe be donjifi*, (西門慶が来たことを聞いて) 後段に「あなたがこんなに早く来ると知りませんで」とあり、予想より早い帰宅の様子を主題とする有標情報である。従属節の「AがBする」という意味において、主語が主格では中立的意味だが、対格では「Aが」に、属格になると「Bすること」に主眼を置いた構文的機能を果たしていると考えられる。

[E-4]

ダグール語の述語人称欠如による主語の非主題化

山田洋平

モンゴル語族ダグール語の述語人称とは、主語人称と一致する述語の文法範疇である。従来、述語人称の接語は必須の要素であるかのように扱われ、これを欠く構造については記述がない。発表者の調べによると、ダグール語の述語人称は、一致すべき主語が主題でない場合に無標となる。例えば *bii šinii jaa-sen usuwu-i-šini hoo jaa-sen*. {1SG 2SG.GEN to.tell-PERF word-GA-2SG all to.tell-PERF} 「私はあなたが言ったことを全て言いました。」では、下線部の述語動詞に付されるべき一人称単数の述語人称が付されていない。これは先行文脈の「全て伝えたか」(=言いつけは守ったか)に対する返答文であり、文全体に焦点が当たり主語が主題になっていないためである。形態的に主題を明示しないダグール語では、典型的には無標の主語が主題を兼ね、述語人称が現われる。Lambrecht (2000)によれば、通言語的に主語が非主題化されると主語らしさが減ずるといふ。ダグール語でも、主語の非主題化によって述語人称が一致を示さなくなり、述語人称が無標になる。

[E-5]

エスキシエヒル・カラチャイ語の有声唇歯摩擦音

菅沼健太郎、藤家洋昭、アクバイ・オカン・ハルク

本発表ではチュルク諸語のひとつであり、危機言語とみなされているエスキシエヒル・カラチャイ語の音素について議論する。具体的には、同言語の有声唇歯摩擦音には [+円唇性] をもつもの (*vʷ*) ともたないもの (*v*) の2つがあることを示す。

/vʷ/ と /v/ はその音声的実現が類似しており、/vʷ/ と /v/ の最小対は現段階では存在しない。それにも関わらずこれらを別々の音素として扱うのは、この2つは [±円唇性] の調和における振る舞いが異なるためである。具体的には、/vʷ/ に後続する高舌母音は円唇母音で実現する一方、/v/ に後続する高舌母音は非円唇母音で実現する。

本発表ではこのような差異が生じるのは /vʷ/ が [+円唇性] をもち、[±円唇性] の調和に関与する音素、すなわち /v/ とは異なる音素であるためであると考え。つまりエスキシエヒル・カラチャイ語の有声唇歯摩擦音には [+円唇性] をもつもの (/vʷ/) ともたないもの (/v/) の2つがあるのである。

[E-6]

トルコ語、アゼルバイジャン語の複数接辞のバリエーション

青山 和輝

トルコ語とアゼルバイジャン語の複数接辞は多くの点で共通のふるまいを示す。両言語は複数接辞の用法を構造上区別しており、たとえば複数接辞と所有接辞の承接順を見ると、ordinary plural の場合 [語幹—複数—所有] となるが、associative plural の場合は [語幹—所有—複数] と複数が外側に来る。細かい点では差異が見られ、トルコ語ではいずれの用法にも接辞 -IAr を用いるのに対し、アゼルバイジャン語では ord.pl. には -IAr、assoc.pl. には -gil を用いるという風に、接辞の使い分けがなされている。

本発表では分散形態論の枠組みで、これらの複数接辞の構造上の位置づけを明らかにする (cf. Wiltschko 2008, Butler 2011)。具体的には、ord.pl. を (印欧語の分析で一般に行われるように) DP 下の NumP に据える一方、assoc.pl. は DP に adjoin する要素であると提案する。

[E-7]

トゥバ語の再帰

江畑 冬生

本発表では、トゥバ語の再帰接辞の用法を「再帰」「逆使役」の2つに大別することでその意味的特徴と形態統語的特徴をうまく整理できるのだと主張する。再帰用法の中心的意味は、「自分を」「自分の身体部位を」「自分のために」「自力で」等である。再帰用法では、対格目的語の保持と自動詞からの派生が可能である。再帰用法の周縁的意味として、「対象欠如」と「状況可能」がある。「対象欠如」では、意味的には他動詞的であるが対格目的語を欠く。「状況可能」ではしばしば否定形で現れ、主語に意志はあるが外的要因により行為を遂行できない状況を表す。このように再帰用法が幅広い意味をカバーし意味的予測が困難であるのに対し、逆使役用法は予測が容易である。逆使役用法では、対格目的語の保持も自動詞からの派生も不可能である。どのような派生接辞が後続するのかについても、再帰用法と逆使役用法は明確な相違を示す。

[F-1]

日本の諸方言における「逆使役」—通方言的研究に向けて—

林 由華, 田村 早苗

北海道・東北の諸方言には、自発構文の用法の一部として〈逆使役〉(anticausative)用法があることが指摘されている(佐々木 2007 ほか)。〈逆使役〉とは、動作主が文中に明示されない用法で、対応する他動詞文よりも結合価が1つ減少しているという特徴がある。逆使役用法が注目を受けた結果、典型的な自発用法を表す形式を持たない方言においても、逆使役用法を持つ形式が存在することが指摘されるようになった(白岩 2012, 坂井 2015)。本発表では、〈逆使役〉の通方言的研究に向けて、①佐々木 2007 ほかによる逆使役用法の特徴付けに一部修正を加えて整理するとともに、②琉球語池間方言の調査データをもとに、受動を主たる用法とする形式が、逆使役用法もカバーする言語が存在することを示し、自発構文の意味のネットワークの中で議論されてきた逆使役用法についてより広い視点から検討すべきであることを論ずる。

[F-2]

主文における主語の形態的具現化：幼児の属格主語と熊本方言の比較から

團迫雅彦

本発表は、共通語と熊本方言の主文における主語の格標識の形態的差異に基づき、「主語の形態的具現化に関するパラメータ」を提案する。その上で、幼児発話の「誤用」の属格主語はこのパラメータ値が熊本方言と同じく、属格指定がなされているために起こることを述べる。ただし、熊本方言では中立叙述解釈のみ属格主語が現れるのに対し、幼児発話では中立叙述・総記解釈に関係なく属格主語が生起するため、属格のパラメータ値は格標識の具現化が談話に依存するタイプの言語(熊本方言)と談話に依存しないタイプの言語(幼児言語)に細分化されることを主張する。

[F-3]

アイヌ語沙流方言の場所表現における「場所名詞」に関する研究

井上拓也

アイヌ語において、普通名詞(概念形あるいは短形)は移動や存在を表す格助詞を直接後置することができず、間に位置関係を表す名詞(位置名詞)を用いなければならないが、「場所名詞」が用いられる場合は省略が可能である(中川 1984 等)。場所表現で現れる名詞句の特徴について、今まで「場所名詞」に関する記述はなされていなかったが、本研究では「アイヌ語口承文芸コーパス」から場所名詞を収集し、形態的特徴を元に分類したところ、大きく分けて(i)関係名詞(位置名詞)を含むもの、(ii)人称接辞を含む(可能性を持つ)ものと(iii)純粹に語彙的なものに分けられることが分か

った。特に (iii) について、kim (山の方) と pis (浜の方) の二単語は、会話の場を潜在的な参照点として、<山-浜>という対立関係において定性を獲得しており、ゆえに関係名詞(位置名詞)と同じ文法的な振る舞いをしていると言える。

[F-4]

アイヌ語の複雑述語における補文構造

岸本 宜久

アイヌ語の複雑述語「V1+ (副助詞) +V2」は、従来、V2 を助動詞的形式とする構文として記述されてきた。V2 には自動詞も他動詞も立つが、V2 が自動詞の場合は他動詞の場合に比べて構文をなす例が少なく、V1 と V2 の自他の間には一種の複合制約があると考えられる。本発表ではアイヌ語沙流方言のテキストを対象として、Role and Reference Grammar (RRG) における Layered Structure of the Clause (LSC) の枠組みから「V1+ (副助詞) +V2」の節構造を分析する。そのうえで、V2 が自動詞の場合は中核接続・従属接合、V2 が他動詞の場合は内核接続・従属接合という異なる接続レベルであることを示し、この接続レベルの異なりからみた「V1+ (副助詞) +自動詞」と「V1+ (副助詞) +他動詞」の示す補文構造の違いおよび複合制約について考察する。

[F-5]

北琉球奄美喜界島上嘉鉄方言の疑問詞述語について

白田理人

奄美喜界島上嘉鉄方言の疑問詞には、文末助詞を伴わず単独で述語をなすもの(以降述語疑問詞と呼ぶ)として、nuwa/nuka/nukai「なぜ、どうした」、duwa/duka/dukai「どこ(にいる/にある)」がある。本発表は、述語疑問詞の形態統語的特徴/意味的特徴について、その他の疑問詞と対照しつつ記述する。主な観察・主張は以下の通りである。

- ・ 述語疑問詞は、語根を X とすると、X-wa/X-ka/X-kai という形を共有している。
- ・ 疑問詞疑問文は基本的に疑問文末助詞を伴うが、述語疑問詞は助詞を伴わず単独で述語に用いられる。
- ・ 述語疑問詞は言語行為によって使い分けられ、<問い>には nuwa/duwa が、<疑い>には nuka/nukai/duka/dukai が用いられる。述語疑問詞以外では言語行為の区別は文末助詞に標示される。
- ・ 述語疑問詞は丁寧標示・疑問補文標示との共起制限を持つ。

[F-6]

宮古語における終止連体形の定動詞性と動詞活用体系の歴史的発展の関係

セリック・ケナン, 林由華

宮古語諸方言のいわゆる終止連体形は、日本語や北琉球諸語などと異なり、終止形の用法として、一回的・具体的な出来事が表せない。また、そのままの形で名詞形や接辞・複合の語幹にもなり、一部の方言では異なる2形式がこの終止連体形として併用されている。

本発表では、この終止連体形が示す性質が歴史的に説明できるとし、次のように主張する。本来別々に存在していた連用形対応形と連体形対応形が、音韻変化により57%ぐらいの動詞の場合に同音になり、その結果、両形の機能を継承した形式が生まれた。それをきっかけに、連用形・連体形という文法的な範疇が融合し、両形が同音になっていない動詞の場合は多くの方言で一方の形式だけが残り、一部の方言（池間、狩俣、伊良部）で、2つの形式が残った。池間方言での調査結果からは、この2つの形式は機能的な差異がないことが判明し、この方言が過渡的な状態を残していると考えられる。

[F-7]

琉球八重山語波照間方言の引用助詞=teに見られる文法化

麻生玲子・林智昭

本発表では、南琉球八重山語波照間方言における引用助詞=teに起きた変化を、共時的に観察される談話資料を基に論じる。波照間方言には、2種類の引用助詞=taおよび=teが観察される。=teは、引用助詞=taと、それに後続する動詞enu「言う」が融合した形式であると考えられる。本発表では、文法化の諸原理（Hopper 1991, Hopper and Traugott 2003など）を参照し、結論として、ta enu > =ten(u)（語境界の喪失）> =te（音素脱落）> =te (enu)（引用標識としての再分析）> =te（新たな文法機能の獲得）、という=teの文法化プロセスを提示する。最終的に、=teは「話者自身が見たこと、確信を持っていること」を示す。この用法は、話者志向への変化を示しているという点でTraugott (1988)の「主観化」に沿った変化とも言えることを指摘する。

[G-1]

日本語の可能構文における格付与

中村 渉

本発表は、日本語の可能構文の格フレーム交替を役割・指示文法の統語構造とリンキング理論を踏まえて説明する。役割・指示文法は、単文の統語構造を内核、中核、節の三層から成る構成素投射と各層を修飾する助動詞類から成る操作子投射に分け、格標識を中核項及び一般的意味役割としてのマクロロールに言及して定義する。①可能接辞の用法が語彙的接辞（動詞と結合して複合動詞を構成する）

と統語的接辞（動詞に形態音韻的に依存するものの、リンキングに関与しない中核操作子として機能する）に分かれること、中核の内核としての再分析と叙述関係の二重化が不可分に統合された二重主格構文の存在を踏まえて、本発表は、他動詞を補部として伴う可能構文の格フレーム交替（「与格-主格」, 「主格-主格」, 「主格-対格」）とこの格フレーム交替に連動する可能接辞と非主語項に付く取り立て詞「だけ」の作用域の広狭を説明する。

[G-2]

「過分義」を表す動補構造および動詞コピー構文に関する考察

—構文文法の観点から—

崔 盼盼

本発表では、項構造の融合と Goldberg (1995) の構文文法理論に基づき、構文拡張の視点から「過分義」を表す2つの構文の統語形成を考察する。陸 (1990) をはじめ、先行研究のほとんどは「過分義」動補構造「VA了」の意味分析に重心を置き、その「過分」の意味が動詞および形容詞の制限から生じると主張する。本発表では形式的に最もシンプルな形容詞文「A」から、過分の意味を持つ「A了」から「VA了」を経て、動詞を繰り返す「V-VA了」文までの構文拡張過程について考察し、それぞれの構文構造を明らかにする。中心となる提案は次の2点である。①「VA了」構文の本質は形容詞文であり、Vは背景化された動作事象を提示する修飾要素に過ぎない。②動詞コピーの「V-VA了」構文は、前半部分の動詞述語文が主節となり、動補構造がそれを補足する補語節であるため、結果構文から拡張される動詞コピー構文（主節の動補構造に動詞述語文の修飾節を付け加える形式）とは異なる。

[G-3]

演繹とアブダクションに基づいた条件文についての考察：推論アプローチによる通言語的分析

森 創摩

本研究では、演繹とアブダクションに基づいた条件文について、英語・フランス語・ドイツ語・標準中国語・日本語その他の言語（スペイン語等）のデータを提示し、そのデータと定言的三段論法を持つ特性から各個別言語の条件節と主節はその個別言語の一般規則（独立節における動詞形式を支配する規則を指す）によって形成されていると実証する。そしてさらに、演繹に基づいた条件文を条件構文の分類項目として認めると、いわゆる修辭的條件文 (e.g. *If you're the Pope, I'm God.*) は演繹に基づいた条件文に分類され、この修辭的條件文と呼ばれるタイプの条件文がなぜレトリカルな響きを持つのかについて、演繹推論に適用される law があまりに不合理なものであるからという説明方法を本研究は主張する（これは通言語的にも適用可能な説明方法である）。

[G-4]

「習得」に関する変化動詞のアスペクト的意味の分析

蘇 丹

従来の先行研究で示唆されているように、動詞とアスペクト的意味は密接な関係を持っており、「習得」に関する動詞を分析する際、アスペクト的意味の分析が不可欠である。高橋 (2003)は、「主体動詞」が「主体の状態が変わる」動詞であると指摘する。本発表での「習得」に関する変化動詞は、「習得する、修める、マスターする」などの「達成動詞」である。

「習得」に関する変化動詞は「主体変化動詞」(工藤, 2014)と似ているが、相違点もある。まず、変化のプロセスがあるか否かという問題である。また、主体の意志性についても問題になる。それ以外に、工藤(1995)によれば、完成性・継続性とパーフェクト性もアスペクト的意味の重要な側面である。完成性・継続性については、習得変化動詞は変化が達成される必然的終了限界を焦点化することを示し、また習得変化動詞のパーフェクト性については、〈状態パーフェクト〉と〈動作パーフェクト〉の二種類があることを示す。

[G-5]

統語的複合動詞 V+疲れる について

木戸 康人

本発表では、V1 が動作主的であり、V2 が非動作主的であると言われる「V+疲れる」は、直接 V1 と V2 が結合した語彙的複合動詞ではなく、V2 が補部に V1 を含む補文を取る統語的複合動詞であると提案する。この提案を裏付けるために、動詞句に適用される統語テストが V1 に適用できること、すなわち、2つの動詞句を仮定しない限り、この事実を説明できないと述べる。そうすることで、「V+疲れる」の複合動詞は影山 (1993) によって提案された他動性調和の原則の反例にはあたらないと提案する。さらに、Saito (2014) による日本語複合動詞の生成メカニズムに対して反例と見なされる「V+疲れる」は Saito (2014) にとっても反例ではないと述べる。

[G-6]

「地図をたよりに」構文における名詞の臨時的意味拡張

氏家啓吾

「彼は私を相手に冗談ばかり言っていた」のような、「XをYに」という形が従属節として主節を修飾する「地図をたよりに構文」において、Yの位置の名詞は非飽和名詞(「~の」という要素を必要とする名詞)または身体部位名詞であるとされてきた。

コーパスを用いた調査の結果、次の例のようななどちらでもない名詞が生起する実例があることがわ

かった。

(1) 穂先が折れ欠けた槍を杖に、大助は父の前へ歩み寄り、笑いかけた。

Xの指示対象がYの役割を担うという解釈になるこのような場合には、飽和名詞が非飽和名詞として臨時的に使われていると考えられる。この例では「杖」という名詞が〈特定の事象にとっての杖に相当するもの〉という意味へと拡張している。

さらにこの構文の指定による意味拡張が繰り返し起こることで定着・慣習化したと思われる「～を舞台に」「～をばねに」といった事例も存在することがわかった。

[G-7]

連体修飾句の振る舞いから見た内包的述語のタイプ分け

三好伸芳

恒常的性質を表す連体句が定名詞句を修飾した場合、一般的に非制限的な解釈となる。しかし、心内想起等を表す述語が主節に現れた場合には、連体句が制限的に解釈される。

- (i) a. 私は医者の花子を思い浮かべた。
- b. 次郎には政治家の太郎など信じられない。

このような現象は、(i)の述語が、常に対象の可能世界における属性を問題にする内包的述語であることから生じていると考えられる。

以上の事実から、本研究では、内包的述語に少なくとも以下の2タイプがあることを主張する。

タイプ I・・・ 名詞句の記述内容を、特定の可能世界と特定の時間領域のいずれかにおける属性として解釈するもの。

タイプ II・・・ 名詞句の記述内容を、常に特定の可能世界における属性として解釈するもの。

このような分析により、(i)のような連体修飾句の振る舞いが説明されるだけでなく、従来文法論的な観点から論じられてこなかった内包的述語の内実を明らかにすることが可能となる。

[H-1]

名詞句内部における未確定表現の認可の方略

中島 優

本発表は、日本語の未確定表現を含んだ特定の名詞句には主要部移動が関与していることを示す。未確定表現の認可の方法として、Watanabe(2004)の D^0 に位置する量化助詞が、「何も」などの量子子を構成するために、未確定表現と一致するメカニズムを踏襲する。名詞句の構造に関してはWatanabe(2006)を踏襲する: [DP [QP [CaseP [#P NP #] Case] Q] D]。量子子は一般的に共起する名詞の加算・不可算および単数・複数の指定することから(Chierchia1998), 未確定表現の認可に役割を果たす素性は、可算・不可算を担う[±number]素性と単数・複数を担う[±singular]素性であると仮定する。本発表

の理論的示唆として、最小性との関連から主要部移動は統語演算であることを示す。

[H-2]

日本語直接引用節再考 —生成文法・日本語学の観点から—

野口 雄矢

従来、日本語学では、引用助詞「ト」を用いた引用節は、人称代名詞等の直示的表現が埋め込まれた時の解釈をもとに、文法的な観点から「直接引用節」と「間接引用節」に大別することができると論じられてきた (e.g., 砂川 1989, 藤田 2000)。特に、その内部に終助詞、丁寧体「ます/です」、感動詞、言いよどみ等が生起している引用節は、直接引用節に属すると主張されてきた。本発表では、wh 要素のスコープやかき混ぜといった統語的操作を考慮に入れ、これらの直接引用節を、文法的な観点からさらに2つのクラス (A 類・B 類) に大別できるということを主張する。

さらに、本発表では、上記の記述的な主張に対して生成文法的な観点から検討を加え、先行研究での知見をもとに、直接引用節 A 類・B 類それぞれの派生方法について考察する。具体的には、A 類はト節内部に独自の統語構造を有するが (cf. Noguchi 2016)、B 類はそれを有さず、音韻素性のみを伴って派生される (cf. Partee 1973) と論じる。

[H-3]

イディオム断片 DP の関係節化における補文標識と wh 関係代名詞の選択について：

部分格付与による統一的説明

高橋 洋平

制限的關係節の中には、wh 関係代名詞よりも補文標識(\emptyset /*that*)の方が好ましい事例が存在することがよく知られており、特にイディオム断片 DP 関係節化の標的になった場合がそれに該当する。本発表では、Tonoike (2008)が提唱する主要部繰り上げアプローチを枠組みとし、特に Tonoike の「関係代名詞は関係節 CP 指定部に残された決定詞 D のコピーが素性値に基づいてスペルアウトしたものである」という見解を踏まえて、この事象に派生的な説明を与える。重要な経験的証左として *there* 構文の意味上の主語の関係節化と観察されるイディオム事例との並行的な諸特性を取り上げて、本発表では「イディオム事例においても、主要部 D には部分格 (partitive Case: e.g., Lasnik (1995))が付与され、部分格が付与された D は \emptyset としてスペルアウトする。」と提案する。

[H-4]

名詞の修飾辞を伴う後置文：移動と削除に基づく分析

木村宣美

後置文 (RD 文) は2つの節 (bi-clausal) から成る文で、2番目の節内の要素が「かき混ぜ」で文頭に移動し、それ以外の要素が最初の文との同一性に基づき削除されるとの分析が提案されている。この

ような移動と削除に基づく分析にとって問題となるのが、属格の名詞表現等の名詞の修飾辞 (prenominal modifiers) を伴う RD 文である。というのは、名詞の修飾辞の移動は、左枝条件 (LBC) に違反し、許されないからである。本発表では、名詞の修飾辞を伴う RD 文において、LBC 以外の島の効果 (island effects) が観察されることを指摘し、仮説「名詞の修飾辞を含む名詞句全体が移動する」を組み込んだ、移動と削除に基づく分析を提案する。さらに、RD 文には空所を伴う RD 文と空所を伴わない RD 文があるが、島の効果が観察されるかどうかに着目し、派生過程に違い (空所を伴う RD 文は移動と削除で導かれるが、空所を伴わない RD 文は削除で導かれる) があることを論じる。

[H-5]

Partial Control PRO as an associative plural

Asako MATSUDA

Partial Control (PC) constructions (e.g., *John preferred to meet at six.*) allow the reference of the controller to constitute just a subset of that of PRO (Landau 2000). The goal of the study is to provide a DP-internal analysis of PC PRO that captures this effect. I propose that the structure of PC PRO looks very similar to that of associative plurals such as Japanese *Tanaka-tati*. Adopting Vassilieva's (2005) analysis of associative plurals, I argue that PC PRO consists of two nominal elements: the controlled element at SpecDP and the NP, which has group reference. The idea that PC involves associative semantics has been previously suggested, but little attention has been given to PRO-internal structure to account for it.

[H-6]

日本語の例外的格標示構文における目的語上昇パラドックス

田口茂樹

日本語における例外的格標示構文では、補文主語が主文へ顕在的に上昇するという分析が主流であった。一方、同構文の補文主語が補文内に残留し、移動は目的語上昇による義務的なものではなく、かき混ぜ操作による随意的なものである、とする分析も提案されている。

本稿では、日本語の例外的格標示構文における補文主語が、主文に上昇することを示す例と、補文内に残留することを示す例とが共存するというパラドックスを、非顕在的目的語上昇という統語操作に基づいて考察する。また、このパラドックスへの解決策として、一般化(1)を提案する。

- (1) 非顕在的移動操作は、スコープ解釈 (S_1) に加えて新しいスコープ解釈 (S_2) を生み出すことができる。ただしそれは、 S_2 と同等のスコープ解釈を生み出す顕在的移動操作が存在しない場合に限られる。

さらに、(1)を主格目的語構文に応用し、同構文において逆スコープの解釈が可能である点についても言及する。

日本語間接受動文の被害性と格配列理論

加 賀 信 広

日本語受動文の統語的分析には、直接受動文と間接受動文を同一の複文構造から派生する同一構造説と、両者に異なる構造を設定する非同一構造説が存在している。本発表は、そのどちらの説にも与しない第3の立場ともいふべき説を提案する。直接受動文は、非同一説と同様に単文構造をもつと仮定し、一方の間接受動文については、マクロなレベルの項構造は直接受動文と同じであるものの、空の動詞を含み、その第3項が節をとる点で直接受動文と異なると仮定する。すなわち、間接受動文「太郎が花子に泣かれた」の構造は [太郎が 花子に [PRO 泣く] V-られた] であると分析し、「太郎が花子に泣くことをされた」ほどの意味に対応すると考える。この分析に基づき、間接受動文がもつ被害性の読みの起源について考察するとともに、受動文および関連構文（使役文、～してあげる文、など）の格特性について、Baker (2015) で提示された「依存格」の考え方を応用した分析を示す。

■ポスター発表（6月25日（日） 11:30-12:50）

[P-1]

共通スラヴ語における前舌母音化の音韻的条件

大山祐亮

スラヴ諸語の祖先にあたる共通スラヴ語においては、*_iの直後の後舌母音が前舌化する場合がある。しかしながら、この変化についてこれまでに主張されてきた条件には反例が多く、未だ十分に解明されているとは言い難い。

そこで本発表では、Rix(2001)および Trubačev(1974–2016)に収録されている語彙素の再建形のデータと、Beekes(2011)の屈折語尾の再建形のデータを利用しながら、この前舌化の条件を、早期共通スラヴ語における語末の母音と鼻音からなる*-VN の音節構造という別の問題と組み合わせて考察することを試みた。その結果、音節が1モーラであるときは全ての母音が前舌化し、他方で音節が2モーラ以上であるときは、原則として閉音節の場合は前舌化が起こり、開音節の場合は前舌化は起こらないということがわかった。これにより、前舌化は語末子音の脱落に先立つ音変化であるということが示唆された。

[P-2]

イッド(一度)にロッゴ(六合)? 語根融合における音韻制限の多様性

松浦 年男

標準日本語には二字漢語や数詞といった語根融合において、促音の直後に濁音は現れないという「有声性制約」と、語根の尾子音が/k/の場合に促音になるのは直後が/k/のときに限るという「調音位置制約」がある。しかし、九州地方の方言では有声性制約を破ると思われる現象が報告されていた。本研究ではこのような語根融合に関する詳細を明らかにすべく、長崎市、天草市本渡、天草市深海、天草市牛深、小林市の5地点において数詞+数助詞(全地点)、二字漢語(小林市)に関する調査を行った。まず数詞については、小林市と天草市深海において有声性制約を破るものが見られ、さらに、小林市では調音位置制約も破っていた。次に二字漢語については、有声性制約を破る一方で調音位置制約に従っていた。これらの結果は語根融合の音韻過程が標準日本語と異なる地域があることを示しており、また、数詞が音韻的に特殊な音韻的指定を持つことを支持している。

[P-3]

中国語・天津方言の感動詞の記述的研究

—「诶(ei)」を中心に—

本発表は、中国語・天津方言の会話で高頻度で現れる感動詞「诶 (ei)」を取り上げ、記述を試みる。天津方言の「诶」のイントネーションは、上昇調、緩やかな下降調といった中国の共通語「普通話」に共通する場合もあれば、低いところからはじまり、さらに下降した後上昇するという独特な側面もある。本発表は、後者に焦点を当て、分析する。まず、対話場面での肯否疑問文に対する肯定応答の際、意見陳述に賛成する際、命令・請求に対する承諾の際の「诶」の特徴をまとめる。また、「诶」の意味をすべて把握するため、コミュニケーション以外の場面、即ち独り言の際に発せられるかどうかについても検討する。最後に、他の感動詞と比較しながら、「诶」の意味記述を行う。

[P-4]

日本語量化文解釈の方略と選好性について

藏藤健雄, 井上雅勝, 松井理直

「X が Y を V した Z に～した」のタイプの文において、X と Y がともに裸名詞（裸—裸）の場合やともに量化されている（二重量化）場合に比べて、X, Y のいずれか一方が量化される（片側量化）場合には「Z に」の語句でガーデンパス(GP)効果が低下する（井上他 2008）。この観察から、二重量化では裸—裸のようなグループ解釈が行われているが、片側量化では、オンラインでの量化計算の際、文構造の決定が保留され、その結果 GP 効果が軽減すると考えられる。本研究ではこの仮説を検証するために、新たに開発した独自の手法により裸—裸、二重量化、片側量化の解釈パターンを調査した。しかし、二重量化と片側量化の間でグループ解釈の割合に差はみられなかった。一方、二重量化では、適切に量化計算しているとはいえない解釈の割合が片側量化に比べ有意に高かった。本発表ではこの量化方略の違いが GP 効果に影響を与えている可能性を指摘する。

[P-5]

3つのタイプの認識的不定表現

金子真

認識的不定表現は、話者が名詞句の指示対象を同定できないことを示す。多くの先行研究では、異なる言語の様々な認識的不定表現に対して統一的分析が提案されてきた。本発表は、いくつかのテストとコーパス調査をもとに、次の3つのタイプを区別することを提案する。更に日本語では、格表示された名詞句に後続する WH 文、名詞句に先行する WH 文、WH 文がそれぞれに該当すると論じる：A) 名詞句の代替集合が2つ以上の要素を含むことを要求し、要素が1つの名詞句 (ex. その本屋で1番高い本) や、指示対象が名前や指差しで同定される名詞句 (ex. 鈴木という人、あそこにいる人) とは共起しないタイプ；B) 名詞句の同格表現であり、タイプ A のような制約が課されないタイプ；C) ス

ルーシングを受けた挿入句的疑問節に相当するタイプ。タイプ A、B の非同定の意味は会話の含みであるのに対し、タイプ C の場合は慣習的含みでありキャンセルできない。

[P-6]

Preverbs and applicative affixes

Deokhyun NAM

‘Preverb’ (‘postverb’ if suffixed) is defined as a kind of lexical derivation device (Beekes 1995) and ‘applicative’ is treated as a valency-changing grammatical category (Dixon 2012). Despite this apparent functional difference, however, they have analogies. First, applicative is realized predominantly by verbal affixes (ibid.: 295), like preverb. Besides, as this presentation clarifies (with a diagram), preverbs and applicative affixes constitute a seamless continuum across languages. Each affix’s location within the continuum is determined according to three criteria: (a) Has spatio-temporal meanings (e.g. English *under-* in *underestimate*). (b) Takes arguments (e.g. Latin *ad-* in *adeo*). (c) Affects valency (e.g. Hupa *e:-* (Campbell 2010)). The criteria (a), (c) and (b) concern typical preverbs, typical applicative affixes and the intersection, respectively.

■ワークショップ（6月25日（日） 10:00-12:00）

[W-1]

所有の言語学: *To Have, or Not To Have*

企画 石塚政行

司会 西村義樹

コメンテーター 梅谷博之, 西村義樹

普通どんな言語にも所有を表す手段があるが、その意味的内実を規定するのは難しい。諸言語の所有表現は、所有権・全体部分・親族関係という中核の意味を共有しつつも、実際に表す関係の範囲を異にする。ところで、所有文には所持・獲得動詞由来の HAVE 型他動詞を述語とする構造がよく見られるが、一方で、場所に物が存在することを表す存在文と同様の構造が所有文としても用いられたり、HAVE 型動詞が存在文の述語になったりすることも多い。後者の事実が示唆する所有と存在の隣接性は、所有の本質を理解する上で特に重要である。本 WS では、所有表現と存在表現が一つの言語の中で競合する例に注目する。所有と存在を構文的に区別する言語では、重なり合う両概念が「持つべきか持たざるべきか——その関係を所有と存在のどちらで表現するか」という観点から分けられる。その区別を動機づけている意味的基盤を明らかにし、所有の通言語的研究に新しい視点を提供する。

[W-1-1]

チェコ語の所有文と存在文が表す全体部分関係

浅岡健志朗

チェコ語の HAVE 型他動詞文（所有文）は所有の中核的意味を表すが、これが表現し得る関係の範囲は明らかにされていない。中核的意味のうち全体部分関係には所有文と存在文のどちらでも表現できるものがあることに着目し、両者を対照すると、(1) 所有文でのみ表現できる関係（例：机と脚）(2) 両者ともに表現できる関係（例：城と堀）(3) 存在文でのみ表現できる関係（例：机と本）があることが分かる。この振る舞いの違いには、2つの要因が関与している。すなわち、部分（存在物）が全体（場所）に対してどれだけ不可欠で不可分かという程度（内在性）と、この2者間の関係がどれだけ時間的に安定しているかという程度（恒常性）である。(1)の関係は(2)の関係よりも内在性が高く、(2)の関係は(3)の関係よりも恒常性が高いという一般化ができる。この2つの要因に応じて、対象の関係を全体部分関係として捉えるか存在として捉えるかが決まる。

[W-1-2]

バスク語の位置属格と存在文が表す全体部分関係

石塚政行

バスク語の属格（限定所有における所有者標識）は2つある。所有属格は、全体部分関係を含む所有の中核的意味を表す。位置属格は位置格の連体形に相当し、「～にある・～での」を意味するが、一部の全体部分関係も表せる。一方、叙述所有で中核的意味を表すのは HAVE 型動詞を用いた所有文であるが、一部の全体部分関係は存在文でも表せる。

このように、限定・叙述ともに全体部分関係の一部に存在の形式が使えるのだが、本発表ではその使用が可能な範囲にずれがあることを指摘する。たとえば「ビルバオの公式名称」は叙述では所有文でしか表せないが、限定では逆に所有属格が使えない。このずれには所有者の場所性が関係している。叙述の側では、所有物の所有者に対する内在性、所有関係の恒常性によって所有と存在が区別される。限定の側では、場所として捉えやすい指示対象を持つ地名や普通名詞の場合には、内在性・恒常性にかかわらず位置属格が用いられる。

[W-1-3]

タガログ語の所有と存在のあいだ

タガログ語の所有文と存在文はともに述語 *may* を用いて表現する。所有文は「*may* + 所有物 + 所有者（主格）」という構文だが、存在文は「*may* + 存在物 + 存在場所（場所格）」という構文をとる。両者の違いは主格と場所格のどちらを用いるかという違いでしかない。タガログ語は所有文と存在文の構文的隣接性を体現する言語なのである（Lyons 1967）。本発表では、この形式的な平行性に反して、所有文と存在文が基盤とする捉え方は大きく異なっていることを主張する。具体的には、所有文は、分離不可能の関係および恒常の状態を表現し、一方で、存在文は分離可能の関係および一時的状態を表すと指摘する。さらに、上記の所有文・存在文の違いが、名詞句内における所有・存在表現、所有者述語構文・場所述語構文についても並行的にあてはまることを指摘し、「所有 = 分離不可能・恒常的」「存在 = 分離可能・一時的」という図式がタガログ語の文法を貫く特徴であることを示す。

[W-2]

スワヒリ語圏アフリカにおける多言語状況の実態—言語接触状況下での多様な言語現象から捉える—

企画・司会 品川大輔

本ワークショップは、これまで主に社会言語学的なアプローチから観察・記述されてきたスワヒリ語圏アフリカにおける多言語状況に対して、言語接触時にみられる言語現象を中心とした言語学的なエビデンスを用いて、その実態を言語形式面から具体的に捉えることを目的とする。多言語状況下での言語使用の実態についての観察を出発点に、民族語（L）同士の接触状況で観察される言語現象、支配的言語であるスワヒリ語（S）とLとの言語接触到起因する言語現象、そして都市的環境においてSと（複数の）Lが接触することで創出される混合言語コードにおける文法基盤の形式的変容について、実証的な言語データを用いて検討していく。これによって、従来のスワヒリ語圏アフリカの多言語状況に対する抽象的な理解を更新するとともに、そのような状況下での言語接触到起因する言語現象の多様な実態について、言語形式面からのアプローチに基づく新たな知見を提示する。

[W-2-1]

民族語とスワヒリ語のcode-mixingを含む会話に見られる言語使用の実態

查掛沙弥香

タンザニアにおいて、国家語であるスワヒリ語と民族語の間には明確な社会的階層差が存在している。しかし、使用領域や会話の内容を考慮しても、従来社会言語学で言われてきたような、「言語が担う社会的機能の差に伴う使用言語の選択」という解釈では説明できない言語使用が行われている。さらに、話者の言語使用に関する意識と実際に使用される言語の間にも乖離が見られる。話者が、自分は

「スワヒリ語を話している」、あるいは「民族語を話している」と申告している場合でも、実際には多くのcode-mixingが見られ、「ひとつの言語」を話している状況とは言い難い。本発表では、タンザニア南部ンジョンベ州のキングア語圏とベナ語圏において収集した会話のデータから、スワヒリ語と民族語間の境界が、使用者の意識においても実際の使用においても曖昧になりつつある状況を報告する。

[W-2-2]

民族語間の言語接触による文法レベルの影響

安部麻矢

タンザニアの北西部の西ウサンバラ山塊一帯に居住するマアの人々の民族語であるマア語には、内マア語と外マア語と呼ばれる2つの変種がある。これらの変種はいずれも、それぞれ異なる人々により母語として話されている。外マア語はマアのコミュニティにおける共通言語であり、内マア語の母語話者は外マア語を話せるが、外マア語の母語話者は内マア語を話せないという不均衡が存在する。また、いずれの変種の話者も、この地域における圧倒的多数派民族の言語であるシャンバー語を話すことができ、シャンバーの人々とは、通常はシャンバー語で会話を行う。さらにタンザニアの国家語であるスワヒリ語も、シャンバー以外の人々との会話や学校などの公的な場で用いる。このように重層的に共存する言語に見られる、より使用領域の大きい言語（シャンバー語やスワヒリ語）から、より使用領域の小さい言語（外マア語や内マア語）への文法レベルの影響について報告する。

[W-2-3]

スワヒリ語と民族語の言語接触による文法レベルの影響

米田信子

スワヒリ語の浸透によって、スワヒリ語圏アフリカの諸民族語には、スワヒリ語からのさまざまな影響が見られる（Yoneda 2010, Petzell 2012）。その範囲は語彙のレベルだけでなく、文法レベルにも及ぶ。このような現象を、話者たちはスワヒリ語からの借用や混合ではなく、民族語の新しい「変種」として認識するに至っている。言語接触による影響は、スワヒリ語から民族語への一方的なものではなく、民族語がスワヒリ語に与えている影響も少なくない。特に、スワヒリ語以外の多くのバントゥ諸語に共通して存在するような接辞は頻繁にスワヒリ語に混入されているが、それらを取り込んだスワヒリ語は次第に定着してきている。本発表では、タンザニアの民族語に見られるスワヒリ語からの文法レベルの影響、およびスワヒリ語に見られる民族語からの文法レベルの影響、さらにそこから新たに「変種」として定着しつつある現象の例を報告する。

[W-2-4]

スワヒリ語を基盤とする都市混合言語における新たな文法特徴の創出

品川大輔

ケニアの首都ナイロビで発生した都市言語であるシェン (Sheng) は、スワヒリ語を文法基盤とし、英語、さらにはキクユ語等の民族語を語彙供給言語とする混合言語コードとして一般には理解されている。社会言語学的に類似の位置づけにあるタンザニアの「ストリート・スワヒリ語 (“Lugha yaMitaani”)」が標準的なスワヒリ語の文法基盤をほぼ維持していることとは対照的に、シェンにおいては明らかな文法レベルでの構造特性の変容が確認される。このようなスワヒリ語と民族語との接触に起因する文法基盤変容の要因としては、i) 言語接触一般に見られるような (屈折変化の) 単純化、ii) 分析的構造への指向性、iii) (基層) 民族語にみられる機能形態素や構造特性の導入などが従来指摘されてきた。本発表では、主に関係節に関する具体例を用いて、これらとは別の文法基盤変容のプロセス—既存形式の機能シフト—について論じる。